

枕草子 春は、あけぼの

一、の文章から(1)ジャンル(2)成立時代(3)作品名(4)作者名を正確に抜きだし、読み書きできるようにしておく。二か所の空欄()よりも大事といえます。

・三種類の章段名を漢字で書けるようになっておこう。

作者 清少納言。氏名の一部と官職名が呼び名となっていています。本名は分かっています。父・清原深養父(いづれも有名な歌人です)。

※一条天皇には五人も奥さんがいました。中宮と呼ばれる奥さんに、定子、彰子の二人。女御と呼ばれる奥さんに義子、元子、尊子の三人がいました。

・中宮・定子に仕えたのが、この作品の作者、清少納言。一方、中宮・彰子に仕えたのが『源氏物語』の作者、紫式部。時代に随筆と物語で大作が生まれたことになりました。

二、この作品では「あけぼの」が出てきますが、他に「あかつき」も朝の表現として見られます。時間帯に違いがあり、「あかつき」はまだ周囲が暗く、開け始める前を指します。

問 何に対して「闇も」言っているのか。：「も」は同等のものと並立するとき用いる助詞。「闇」と対立している景色はこの場面では何かと考えてみよう。

P 60 L 7 近うなりたる ↑ 近くなりたる、の「ウ音便」

L 9 まいて ↑ まして、の「イ音便」

P 61 L 1 風の音、虫の音：平安時代には、「おと」は風や鐘などの比較的大きな音を、「ね」は楽器や人の泣き声、鳥や虫の声を指した、と言われる。

三、**問** 「わろし」と判断した理由は何か。：古典において「よし」「よろし」「わろし」「あし」が評価、判断の基準になる形容詞になります。訳すと「よし」|| 良い、「よろし」|| 悪くない、「わろし」|| 良くない、「あし」|| 悪い、となります。

歴史的仮名遣いから現代仮名遣いへ

・教科書本文の歴史的仮名遣いの箇所に、傍線を施しました。これを現代仮名遣いに直せるか、確認してください。

P 60 L 1 やうやう 山ぎは L 3 なほ 飛びちがひたる L 4 をかし L 8 さへ L 9 あはれなり
P 61 L 1 言ふ L 4 火桶

うつくしきもの

二、教科書では「装束きたてる」と動詞が出てきますが「装束」という名詞は重要語句です。

※古典特有の漢字の読み書き

P 62 L 3 指 L 4 尼刺ぎ L 7 殿上童 L 10 雛 L 10 葵 L 12 二藍 (殿上童以下、四語は歴史的仮名遣い)

P 63 L 6 瑠璃

・教科書本文の歴史的仮名遣いの箇所に、傍線を施しました。これを現代仮名遣いに直せるか、確認してください。

P 62 L 2 はひ来る L 3 をかしげなる とらへて L 5 おほる かきはやらで L 13 結ひたるがはひ出でたるも
P 63 L 1 男児 L 2 をさなげに L 3 にはとり

・教科書本文の発音に注意すべきところに、傍線を施しました。音読する際に気をつけましょう。

P 62 L 9 らうたし

P 62 L 12 いみじう ↑ いみじく、の「ウ音便」

P 63 L 3 白う ↑ 白く、の「ウ音便」

L 4 かしがましう ↑ かしがましく、の「ウ音便」

※現代語とよく似ているが、意味が異なる語句など

P 62 L 7 ありく(歩く) L 8 あからさまなり うつくしむ(慈しむ)

中納言参り給ひて

学習書P 82下段 ◇語句・文法◇にも書かれているが、この章段は、作者から見て敬意を払うべき人物が二人もいるので、「二方面への敬語」が多用されている。

(例) 中納言参り(中納言の動作を受ける中宮を高める謙讓語) 給ひ(参上という動作をしている中納言を高める尊敬語)

☆動作をしている人への敬意「尊敬語」
☆動作を受け止める人への敬意「謙讓語」

「
※係り結びの法則

P 66 L 1 ～ 2 隆家こそ侍れ。 L 3 いかやうにかある。 L 5 となむ人々申す。
L 8 かやうのことこそは：入れつべけれど（「ど」があるため、結びの消滅）

※「陳述の副詞「叙述の副詞」による文末の呼応

P 66 L 2 おぼろげの紙はえ張るまじければ：「え」＋動詞＋打消↓（不可能）「張ることができそうもない」
L 4 さらにまだ見ぬ骨のさまなり：「さらに」＋動詞＋打消↓（否定）「いまだかつて見たこともない骨の様子だ」
L 9 一つな落としそ：「な」＋動詞＋「そ」↓（禁止）「一つ残らず落とすな」

問 「かたはらいたき」の意味は何か。：漢字で書くと「傍ら痛き」。傍で見ていて痛々しい、苦々しい、いたたまれない。

更級日記 門出

一、毎回書きますが、この文から（1）作者名（2）作品名（3）ジャンル（4）成立年代を覚えておこう。
作者：菅原孝標女。『蜻蛉日記』の作者、藤原道綱母と同様、当時の女性の名前は不明であることが多い。

P 70 L 1 あづま路の道の果てよりも、なほ奥つ方：常陸国よりもっと奥の方である上総国（房総半島が入り組んでおり、京都から見て行きにくかったのだろうか）

L 2 あやし：漢字では「怪し」ではなく「賤し」と書いて、身分が低い、みすばらしいなどの意味がある。

L 3 いかで見ばや：願望の終助詞。「なんとかして見たいものだ」

L 4 宵居（よいゐ）

L 5 いとどゆかしさまされど：「ゆかし」だけだと「好奇心があつて、知りたい、触れたい」という意味の形容詞だが、ここは「ゆかしさ」と名詞形である。Ⅱたいそう聞きたいという好奇心が勝るが、

P 71 L 2 九月三日（ながつき）と読む。

旧暦の表現

1月（睦月）、2月（如月）、3月（弥生）、4月（卯月）、5月（皐月）、6月（水無月）、7月（文月）、
8月（葉月）、9月（長月）、10月（神無月）、11月（霜月）、12月（師走）

P 71 L 3 ～ 4 年ごろ：長年 L 6 車：牛車

源氏の五十余巻

※正確には『源氏物語』は五十四帖。四十五（橋姫）～五十四（夢の浮橋）までを特に「宇治十帖」と言い、光源氏没後の子孫たちの活躍を描く。

P 71 L 10 見まほしくおぼゆれど：希望の助動詞。見たいと思ったが。

人語らひなどもえせず。「え」＋動詞＋「打消」↓（不可能）人と相談することもできない。

P 72 L 1 え見つけず。「え」＋動詞＋「打消」↓（不可能）見つけることができない。

L 3 太秦（うずまさ） L 8 櫃（ひつ） L 12 几帳（きちやう）

P 73 L 1 袈裟（けさ）

建礼門院右京大夫集

一、詞書の現代語訳

①家の集などといって、歌を詠む人は書き留めることであるが、これは、決してそのようなものではない。ただ、あわれにも、悲しくも、なんとなくむねを難く思われることどもが、ある折々ふと心に感じられたことを思い出されてくるまじり、自分ひとりの目で見るつもりで書き留めておくのだ。

①個人の歌集

訂正 詞書「家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなかれ」：「か」は不要。

○正 家の集などいひて、歌よむ人こそ書きとどむることなれ（こそ：なれ（「断定」なりの已然形）が係り結びになっている。）

※ゆめゆめさにあらず 「ゆめゆめ」＋「打消」（否定）決してそのようなものではない。

P 74 L 1 女院（にようめん） L 4 庵（いほり） L 6 山嵐（やまおろし） L 7 梢（こずゑ） 懸け樋（かけひ）
L 9 墨染めの姿：喪服、僧衣